

「落葉」の音 ―源頼実の歌を通して―

高 重 久 美

『古来風躰抄』下巻は、和歌の変遷の相を説くことが和歌の深奥に迫るとして『古今集』から『千載集』に至る和歌を抄出する。その中で『後拾遺集』の頼実・家経・能因詠が連続して三首収録されているのは注目すべきであろう。

落葉如^(あめのことし)雨^レといふ事をよめる 源頼綱

木の葉散る宿は聞き分く事ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も 36

藤原家経

紅葉散る音は時雨の心地して梢の空は曇らざりけり 37

十月ばかり山里に夜とまりてよめる 能因法師

神無月ねざめに聞けば山里の嵐の声は木の葉なりけり 38

『古来風躰抄』は『後拾遺集』の源頼実の歌をその弟の頼綱のものと誤っており、藤原俊成(二二四―二〇四)が頼実その人を十分認識していなかった蓋然性はあるが、それは反面、頼実の「落葉如雨」題歌そのものを俊成が高く評価していたことを示すことになろう。実際、『古来風躰抄』は頼実がその一員であった所謂和歌

六人党の歌は頼実のこの歌の他には、『後拾遺集』二首『千載集』一首計三首の範永詠を挙げるのみである。

「六人党」と交流を持ち受領層歌人の間に重きをなした能因の歌は、『後拾遺集』の配列に従って頼実・藤原家経の後に置かれているが、この歌そのものが詠まれたのは、後述するように、寛弘七・八年(一〇一〇・一一)十月のことであり、頼実・家経の長久四年(一〇四三)「落葉如雨」題歌より三十余年前となる。「六人党」の頼実、その周辺歌人家経の歌は能因の歌に影響されて詠まれたものであろう。そして、以下に述べるように俊成が認めた頼実の「落葉如雨」題歌は、同時代及び院政期の歌人に影響を与えている。このことを考察したい。

一 白河朝「月前落葉」題歌

頼実の「落葉如雨」題歌の影響について考える前に、「六人党」が後世の歌人に影響を与えた「月前落葉」題歌について触れておく。白河朝(一〇七三―一〇八六)に白河天皇は「月前落葉」題を含む歌会を開かれた。

月前落葉といふところを

御製

もみぢばのあめとふるなるこのまよりあやなく月のかげぞも
りくる

(後拾遺・秋下362)

(和一字・前83)

白河院御時、うへのをのこども月前落葉といへる心をよ
み侍りけるに

橘俊綱朝臣

ひさかたの月すみわたるこがらしにしぐるるあめはもみぢな
りけり

(新勅撰・冬372)

月前落葉

月影のかゝらさりせはもみち葉を ちるとはかりや音にきか
まし

(俊頼I・秋529)

源俊頼(二〇五—二二九?)の家集『散木奇歌集』では「月前落花」
題となっているが、俊頼にはもう一首「月前落葉」題歌がある。

月前落葉といへることを

源俊頼朝臣

あらしをやはもりのかみもたたるらん月にもみぢのたむけし
つれば

(金葉・秋217)

月前落花(俊頼I・秋518)

「永承六人党」(『後拾遺抄注』)の庇護者であった橘俊綱(二〇三
—二〇九)は若き頃の俊頼を養子としていた。源経信(二〇六—二〇九)
は次のように歌っている

若君の、播磨守俊綱のもとにわたりて、五月五日くすた
まやりたまふとて、菖蒲にかきつけられし

かくれぬをわすれさらなんあやめくさ はなのたもとにけふ
かゝるとも

(経信III 59)

(経信II 61)

「頼実と俊頼」については稿を改めるが、後述に窺われる俊頼の
頼実傾倒への素地は、実父経信からのみでなく、ここ俊綱の家に
おいても培われていたと思われる。

俊綱や俊頼の詠んだ「月前落葉」題歌は「落葉」結題という題
のみでなく、表現上も「六人党」の「落葉如雨」題歌を継承して
いる。白河天皇の歌によってみよう。

白河天皇は「紅葉が雨のように降る。雨なのに月光がさす」と
歌うが、その「紅葉が雨のように降る。」という類似の趣向が既
掲の家経(古来風430)及び同座の範永の歌に見える。

西宮にて、落葉あめのことし

夜もすからもみちは雨とふりつむに なかむる月そくもらさ
りける

(範永74)

また、白河天皇の歌は月光は漏りくる程度であり、目に見える
落葉の姿のみでなく、広い範囲の落葉の音も含めて「雨と」と言
うと解すると、静寂な趣が漂う。落葉の「雨」の如き音を詠んだ
ものとしては先の家経に加えて、既掲の頼実(古来風429)・同座
の経衡の歌がある。

おつるはな、あめのことしといふ題

あめかとてぬれしとかつくころもてに かゝるはをしむもみ
ちなりけり

(経衡45)

さらに、白河朝の「月前落葉」題は、次の頼実の「月前紅葉」
題と、散り敷く「紅葉」の上にふりそそぐ月光と、散る紅葉の間
からもれる月光という差異はあるが、月の光と散る紅葉の取り合

わけを考えると、この「月前紅葉」題のことも、念頭にあったと考えられる。

遍照寺にて、人々月前紅葉といふ題よみける

いとくしくもみちちりしくにはのうへに　ひかりをそふるふ
ゆのよの月
(頼実・冬92)

内容上も、同じ「月前紅葉」題の次の藤原定頼の歌と比肩すると、
月ころ式部卿宮にて、月のまへのもみちといふ題を

紅葉をてらす月よは常よりも　かたふくかけのおしまるゝかな
(定頼Ⅱ 145)

頼実の長元九年(1036)～長久四年(1043)(家集配列による)に詠まれた「遍照寺」⁽³⁾での歌(頼実・冬92)が山里の冬の寂寥美を描出して、白河天皇の歌に影響を及ぼしていると思われる。白河天皇の歌(後拾遺・秋下362)は、頼実の「ひかりをそふる」という詞句を利かせて落葉と月の光を詠んだ歌(頼実・冬92)を踏まえているといえよう。

二のVで後述するこの歌会以前の(199)承保二年(1075)九月内裏歌合における三番「夕嵐」という歌題が、頼実の歌題や歌から想を得てのことと思われることも併せ考えると、白河天皇は頼実を充分意識していたと思う。この歌合は白河天皇の、初めての文雅の御遊であった。

白河天皇の歌は頼実の歌に影響されて詠まれたことを右に見た。しかし、「月前落葉」という歌題故、月の光が落葉のありようを規定し、視覚に焦点が置かれていたように思う。以下に「落葉如雨」題歌の中でも秀歌として知られる頼実のそれ(古来風429)に

焦点をあて、落葉と聴覚という観点から落葉を時雨と聞く発想の歌を年次を追ってみてゆきたい。

二「落葉」を「時雨」と聞く

先ず、冒頭で挙げた彼らの踏まえた能因の歌を挙げた上で、頼実の歌の詠まれた西宮歌会と、その影響歌を列举して行く。

I寛弘七・八年(1010・1011)(能因集I配列による)十月

十月許に、山さにとよるとまりて

神な月ねさめにきけは山里の　嵐のこゑは木の葉なりけり

(能因I 38)

(後拾遺・冬384)(古来風431)

能因(968-1035?)の歌は、「風で木々の木の葉が鳴る音」と解せなくもないが、十月の詠であり、歌中の「神な月」は落葉の季節であることの明示であろう。木の葉の散る「落葉」の音を嵐の音と聞き紛うところに趣向があると思われる。『後拾遺集』でも落葉歌群の中に配列されている。「落葉」と雨の音とを聞き紛う趣向は『後撰集』の例もある。

秋の夜に雨ときこえてふりつるは風にみだるる紅葉なりけり

(後撰・秋下407 読人不知)

その中で「嵐の声」として閑寂な山里の落葉を表現したのは能因の功績であろう。

Ⅱ長久四年(1043)冬「落葉如雨」題西宮歌会(詠歌年次につい

ては頼実・家経の家集配列より推定)

落葉如雨

このはちるやとはきゝわくことそなき　しくれするよもしく
れせぬよも

(頼実・冬93)

(後拾遺・冬382) (新撰朗・秋298) (和一字・如967) (袋草紙64)

(今鏡135) (古来風429) (無名抄67) (西行談55) (六華集・冬969)

(題林愚・冬上・落葉如雨5096) (兼載談15)

落葉如雨

もみちゝるをとほしくれのこゝちして　こすゑのそらはくも
らさりけり

(家経11)

(後拾遺・冬383) (和一字・如966) (古来風430)

(題林愚・冬上・落葉如雨5097)

西宮にて、落葉あめのことし

夜もすからもみちは雨とふりつむに　なかむる月そくもらさ
りける

(範永74)

おつるはな、あめのことしという題

あめかとてぬれしとかつくころもてに　かゝるはをしむもみ
ちなりけり

(経衡45)

「六人党」の「落葉如雨」題歌の詠まれたのは西宮である。頼

実の歌(頼実・冬93)は『袋草紙』に「於西宮」とあり(袋草紙

64)、家経の(家経11)は『後拾遺集』に採られて、その勘物に

「於西宮詠之」とある(後拾遺・冬383陽明文庫本頭註)。範永の歌

(範永74)も「西宮にて、落葉あめのことし」と詞書するので、

頼実・家経・範永・経衡の歌は西宮歌会の作としてよからう。

頼実の歌(頼実・冬93)の意味するところについては、VIに挙
げた後藤祥子氏の言が意を尽くしていると思う。同座の家経・範
永・経衡の三人が「紅葉」がちる、ふる、かかると詠む中でただ
一人「このはちる」と詠むところに彼の感覚の鋭さが窺える。ま
た、範永・経衡は落葉を雨と詠み、上の句で時雨と詠む家経も一
句の焦点は視覚で景を捉える下の句にある。

歌頭に「このはちるやと」をもってきて、一気に詠み下した頼
実の歌は、人々に強い印象を与えたであろう。「このはちる」落
葉の音を時雨と聞くといい発想は、それまでの単なる雨と聞くと
いう歌より新鮮な感じを人々にもたらしたであろう。雨という大
まかな概念でなく、さらに細かく捉えた「時雨」、初冬の降った
りやんだりする小雨、それは「このはちる」落葉の音と相俟って、
寂寥感を漂わせ、人を内面に向かわせたりもする。「このはちる」
落葉の音を時雨と聞くといい発想は、繊細な感覚を持つ頼実にし
て初めて可能だったのであろう。この歌を初発として、以後中世
にかけて落葉の音を時雨と聞くといい歌が多く詠まれ、「木の葉
時雨」という語まで生まれることになる。

Ⅲ天喜元年(一〇五三)十月太宰大貳資通歌合(出詠者の官職名より
推定・別稿)

紅葉

一番　右

風にかぜ　おと　に　き　わ　か　ず　ぬ　れ　ぬ　ば　か　り　ぞ　木　の　葉　な　り
ける

二番 左

山高みふもとの里に寝覚して落つる木の葉をしぐれとぞきく

（一五八「永承五年九月—天喜二年十一月」）

冬・太宰大式資通歌合2・3

「六人党」周辺歌人中原長国（九七五—一〇四四）は頼実の「落葉」

結題歌

落葉裳苔上

うちかさねいくよの風かたちつらん この葉そこけのころも
なりける （頼実・冬94）

と影響関係の窺われる詩を詠んでもいる。

（落葉）

ばいたみどりへんずらんかんのつゆ 山深落葉多 長国
毎苔変緑林間露 麋鹿踏紅洞裏秋 （新撰朗・秋294）

山深落葉多（別兼作498） 山深落葉深（和漢兼・冬上960）

次の梅津は、この歌合に出詠している等のその交友関係から資通の山家と思われる。

梅津眺望

（肥前守長国）

雁引弟兄声咽霧 隼駆鳥雀翅成風 （別兼作497）

頼実の「右大弁」資通の梅津山庄での長久二・三年（一〇四二・一〇四三）の詠「右大弁のさそひ給しかは、むめつにまかりて、河辺水秋夕風」（頼実・秋73）と題は異なるが、同じ秋の風を詠んでおり、歌と詩が同座で作られた蓋然性もある。

大式源資通（一〇〇五—一〇六〇）は「六人党」の頼実・頼家・経衡・範永・為仲と家経に作歌の場を提供しており、この歌合を主催し

て、長久二・三年秋に詠まれた頼実の歌

落葉満庭

あさ夕にあらしのはらふにはのをもちりしつもれるはも
みち成けり （頼実・秋69）

（和一字・墨書補入歌22）
の影響下にあると思われる歌を作っている。

紅葉

一番 左

大式

梢にて飽かざりしかばもみち葉のつもれる庭を掃はでぞ見る

（一五八「永承五年九月—天喜二年十一月」）
冬・太宰大式資通歌合1

ここに掲げた頼実の三首（頼実・秋69）（頼実・冬93）（頼実・冬94）は、彼の家集中の「落葉」結題歌の全てである。後朱雀朝に落葉題で歌を詠むことは「六人党」ら、和歌史において、ごく先端を行く歌人達にしか行われておらず、それは後冷泉朝にもいえることであった。そういう中において、落葉題ではなく紅葉題ではあっても、長国や僧さうけいの、頼実の「落葉如雨」題歌（頼実・冬93）を踏まえた歌が詠まれ、主催の資通自身も、頼実の「落葉満庭」題歌（頼実・秋69）を意識した歌を詠んでいるのは、この「紅葉」という設題それからして、頼実の一連の「落葉」結題を念頭に置いたものであったことを示しているよう。長国の一番右の歌は『和歌一字抄』（中29）では「雨中落葉」『別巻和漢兼作集』（495）でも「落葉」であり、資通の歌も後の勅撰集『詞花集』（冬142）では「家に歌合し侍りけるに落葉をよめる」私撰集

『後葉集』(冬207)は「家歌合に、落葉をよめる」、類題歌集『題林愚抄』(冬上5049)でも落葉題となっている。

資通は都から離れた遠い任国での、そして恐らく、彼が主催した歌会・歌合の最後に当たる天喜元年冬十月の太宰大貳資通歌合を開いた時、頼実の「落葉」結題歌を意識したのであろう。現在、残っている資料からは、天喜二年都に帰ってから康平三年に亡くなるまで歌会・歌合を催したことは窺えない。それだけになお、頼実の死後十年経っても、若くして亡くなった従弟のことが資通の胸中深く残っていたことを思わせる。資通自身意識していたかどうかは不詳だが、後世残っている資料からみると歌人頼実として成長するまでに尽力したと思えるのに、音楽においては自負があり、一種の余裕があったことによるのであろう、その頼実が歌人としては自分より優れていると認識すると、素直に思いを行動に移すような、人間としてまことにゆったりとした「あの人から」といふとすくよかに世のつねならぬ人にてその人はかの人とはなともたつねとはてすきぬ」(御物本『更級日記』)おうような人物だったようである。

宇多源氏濟政(九七五-一〇四二)の妻である資通の母(九七五?-?)は、摂津源氏頼光(九六八-一〇三三)の長女で、頼実父頼国(九七四-一〇五八)と同じく藤原元尹女を母とする頼国の同母妹と思われる。その資通を私は若き頼実を彼の志向した和歌世界へ誘った人と考えている。

IV 康平(一〇五八-一〇六三)頃

夜聞落葉

橘則季

よはにちる音はすれども紅葉葉の色をも見ねば時雨とぞ思ふ

(和一字・聞730)

能因と共に「六人党」と交流のあった相模(九三三-三?・一〇六二?)は、則季(一〇三三-一〇六三「枕草子」三卷本勘物)の父橘則長(九八二-一〇三四)と歌を詠み交わしている。

はやうみし人のむまにてあひたるに

後つなたえてひきはなれにしみちのくの をぶちのこまをよそにみるかな

(相模I112)

橘則長ちちのみちのくのかみにてはべりけるころむまにのりてまかりすぎけるをみ侍て、をとこはさもしらざりければまたのひつかはしける(後拾遺・雑二954相模)返し

そのかみもわすれぬものをつるふちの こまかならずもあひみけるかな

(相模I113)

若い頃二人は浅からぬ関係にあったらしい。則長は能因や、相模の夫大江公資(?・一〇四〇)と寛弘期には机を並べる文章生であった。

その孫清信と藤原国房娘との間に生まれた清則が、和歌故実を書き残した母方の祖父国房の書を参照していると清輔に語っている。国房(?・一〇七七?)は惟孝の曾孫で「永承六人党」の周辺歌人である。

内匠頭清則於 或所 言談之次故可 参拝 之由、存知之處、乍 思自然に罷過者也。予云、何等之故乎。内匠云、清則石見守國房之外孫也。彼朝臣和歌之間聊故實所 書置、先可

合見一也。内々不_レ見自加_レ難事出来難_二秀逸歌一_成三瑕瑾_一者也云々。必参上可_レ承_レ仰也云々。予云、御座給者如何。

内匠遥巡含_レ咲矣。

〔袋草紙〕上 雑談

清則の父方の祖父が則季である。「六人党」の庇護者であった源師房（二〇八―一〇七）男である顕房の主催した（一六四）天喜四年五月頭中将顕房歌合に、則季（26）と国房（15）は出詠しており、交渉があったようだ。この歌合の歌題編成は月・五月雨・菖蒲・瞿麦・郭公・花橘・照射・螢・祝・恋の十題十五番であるので、則季の歌はこの折りの歌ではない。

「六人党」範永（九三？―一〇七？）女婿藤原公基男の伊家（二〇四―一〇六）の「暁聞落葉といふことを」詠んだ歌（万代・冬₁₃₄₈）は、三条内大臣藤原能長（二〇三―一〇二）の「後三条院の御時うへのを」のことも、あかつき落葉をきくといふことをよみ侍りける」歌（秋風集・冬上₄₅₃）と同じく、後三条朝（二〇六―一〇七）の「暁聞落葉」題歌会の詠であり、俊頼の次の歌も

終夜聞落葉

ひとりぬるふせやのひまのしらむまで おきのかれはにこの
はちる也
(俊頼 I・冬₅₉₇)

(綺語抄・居處₄₉₀) (和一字・終₂₈₄)

『和漢兼作集』に後二条関白内大臣藤原師通（二〇六―一〇九）の「夜深聞落葉」題詩（和漢兼・冬上₉₄₆）七言二句を記すことを考えると、後年、俊頼、師通同座の「夜深聞落葉」題詩歌会が聞かれた折りの詠であろう。

現下に則季の同座詠は見つからないが、則季の没年、交友のあった国房が「葉落」結題歌を詠んでおり、

葉落月明

藤国房

月もるぞうれしかりける我が宿のそともの木立ときはならね
ば
(和一字・明₂₁₇)
(和一字・落₄₄₅)

「六人党」経衡（二〇八？―一〇七？）との応酬にくつろいだ雰囲気を感じられる康平頃の集まりが、家経（九三―一〇六）息、正家（二〇六―一二二）の談として『袋草紙』に記されていること

式部大輔正家語云、道雅三位の八条にて、人々鹿歌読に、国房歌云、康平之比

秋の野に萩咲き散りてすむ鹿はこれや世にふるかひよとぞ鳴く

聞_レ之経衡云、此歌いとおかしくよめり。まして淳和院辺にて、尼原中にて読ましかば、いますこしおかしからましと云ければ、一座解_レ頤、万人鼓動侍けりと云々。

〔袋草紙〕下 故人和歌難

等を併せ考えて「夜聞落葉」題歌の詠歌年次をおおよそ康平頃としておく。国房は寛徳年間、範永・俊綱・経衡・義孝・良暹らの詠の残る（和一字・林₅₁₆₋₅₂₀）俊綱家の「一葉散林」題歌会で次の歌を詠み

一葉散林

国房

いつしかと初秋風に山しなのをかべのくるす朽葉ちるらん
(和一字・一₁₀₁₅)

藤原国友（夫木・雑三・岡 9185）

永承二年（二〇四）「左大弁」資通家（家経集配列と辨官補任による）の「尋花日暮」歌会でも範永（範永161）家経（家経63）（和一字・暮206）と共に詠（和一字・暮200）を残す。

則季は次の「落葉」結題歌も詠んでいる。

落葉契千秋

橘則季

ちるはなほをしまるるかな紅葉葉をみるべき秋はちとせと思へば
（和一字・契839）

V 院政前期

もみちゝるよはのねさめのやまさとは　しくれもかせもわき
そかねぬる
（匡房I・冬128）

時雨（匡房II・冬77）（秋風集・冬上457）（玉葉・冬867）

時雨（題林愚・冬上4946）

俊頼の「深山落葉」題歌（俊頼I・冬593）（和一字・深1180）（新古今・冬557）は、頼実の歌（後拾遺・雑五1145 頼実）と古くから比較されてきた（『詠歌一體』27・28）（『三五記』207・208）（『六華集』雑下1706・1707）。

日もくれぬ人もかへりぬ山ざとはみねのあらしの音ばかりして
日くるればあふ人もなしまさきちる峯のあらしのおとばかりして

奥は俊頼朝臣の歌なり。上手のしわざにいますこしゆうくときこゆ。はしもよき歌とてこそ後拾遺には入りたる

ならめど、猶たゞまさきのかづらは心ひくすがた侍るにや。

（『詠歌一體』27・28）

大江匡房（二〇四・二二）にはそのような例は判然としない。しかし、その日記『江記』は頼実を含む「六人党」のことを伝えており（『江記』云、往年有「六人黨」。「袋草紙」、橘為仲（二〇二五・二〇八五）の語った話を『江談抄』で語り、その家集『江帥集』からは為仲（匡房I・秋98）や経衡（匡房I・秋78）・頼綱（匡房I・秋116）との交流が窺われる。匡房が十一歳の折、「六人党」の庇護者である師房と関わりのあったことは『続古事談』（第二臣節）に記されており、六人党のことをよく知る人物であったと思われる。頼実の弟頼綱（二〇四・二〇九）との交流をみよう。

よりつなの朝臣、つのに、羽束山　為贈詠不能送、早卒故也

あきはつるはつかのやまのさひしきに　ありあけの月をたれとみるらん
（匡房I・秋116）

摂津源氏の頼綱は晩年、有馬郡の羽束山に居り、匡房が九月廿日頃「秋が終るのもまもない二十日頃の羽束の山の寂しい住居で、この有明の月をあなたは誰と一緒に眺めていることでしょう。」と詠んで贈ろうとしたが、贈れずにいるうちに頼綱は故人となつたという事らしい。頼綱は匡房より十七歳年長であるが、その歌友を匡房が思いやった歌で、結句のあたりに親交の程が窺われる。

頼実（二〇五・二〇四）は頼綱の兄であり、夭折しているので、接触の機会はなかったであろうが、次の匡房の歌は頼実の歌そのままとと言える程、その用語・文脈とも、頼実のそれを踏まえている

と言えよう。

(くるな)

むくらさすかとはとふへき人もなし たゝくゝひなのおとは
かりして (匡房I・夏70)

(長久二年四月九日、於源大納言家有歌合事、(略))

くひな

ふるさとはとひくる人もなかりけり たゝくゝひなのおとは
かりして (頼実・夏24)

この頼実の歌(頼実・夏24)もまた、次代の歌人達に影響を与えた。勅撰集の中で「六人党」の歌を多く採る『後拾遺集』、その選者の藤原通俊(二〇四―二〇九)は承保二年(二〇七)九月、頼実の歌(頼実・夏24)を下敷きにして詠んでいる。

四番 あさぎり

左

蔵人左少弁通俊

山里に霧たちこめて人もなし朝たつ鹿のおとばかりして

(一九九 承保二年九月内裏歌合7)

この頼実の歌(頼実・夏24)に加えて、家集にない頼実の歌

山庄にまかりて日くれにければ

源頼実

ひもくれぬ人もかへりぬ山ざとはみねのあらしのおとばかり
して (後拾遺・雑五1145)

を踏まえたのが公実(二〇五―二〇七)である。近衛の官人(二〇三―二〇八)であった二十歳代に「六人党」の範永の山庄を訪れたことが『袋草紙』に見える公実は、

前大相國語て曰、故東宮大夫公實爲近衛司之時、於範

永山莊、人々和歌讀。被行向一先薦酒出題。其間大夫殿無他事。額をおさへて沈思に入給。範永見之云、如然不入心、秀歌不可有讀、有興云々。古ハ如レ此世英雄之公達、諸大夫山莊二行向哉。

(『袋草紙』上 雑談)

通俊の出詠した同じ歌合において、通輔と共に次のように詠んだ。

三番 夕嵐

左

左近中将藤原公実朝臣

とふ人も通はぬまでになりにつけり峰の嵐の音ばかりして

右

中務大輔通輔

待つ人のおとづれもせぬ夕暮に峰の嵐ぞたえず吹くなる

(一九九 承保二年九月内裏歌合5・6)

この「夕嵐」題の用例は、『平安和歌歌題索引』に拠ると、この歌合のみであるが、歌合乙本(桂宮本)では「ゆふかぜ」題であり、次の頼実の「秋夕嵐」題(頼実・秋73)が念頭にあったであろう。公実・通輔の歌の上の句が頼実の歌の下に通じることからそう推測される。

右大弁のさそひ給しかは、むめつにまかりて、河辺水秋

夕嵐

秋風のをきのはすゑるゆふくれに 人まつひとの心をそしる

(頼実・秋73)

「夕嵐」という、あまり用いられない歌題は、頼実の歌題(頼実・秋73)や歌(後拾遺・雑五1145)から想を得てのことであろう。この歌合の出詠歌人には俊頼の兄の道時・基綱、資通男の師賢・

政長、頼実弟の国仲がいた。VIで挙げる俊頼は、この時二十一歳であった。次の「夕風」題は、この歌合にも触発されたのであろうが、頼実の歌題（頼実・秋73）を強く意識したものであろう。

夕のかせといへる事をよめる

秋きては忍ひなあへそと思へはや 風をとつれてくれかゝるらん。
(俊頼I・秋372)

右の索引に拠ると、「秋夕風」題で詠んでいるのは頼実のみであり、その一部「夕風」題にしても、ただ一人、俊頼のみである。

俊頼の歌は『永久百首』（二二六）（秋十八首）に「秋風」題で収められており（永久百227）、それを晩年自撰の家集では「夕風」題としているところにも、俊頼の「夕風」題へのこだわりが感じられる。

先の『詠歌一體』に記された歌に見たように、音や風の動きに鋭敏な感覚を持つ二人だったのであろう。紅葉散る山里を詠んだ俊頼自身の次の歌も

故郷はちる紅葉ゝにうつもれて のきのしのふに秋風そふく

(俊頼I・秋560)
(中古六37) (愚見抄13) (桐火桶160)

先の頼実の歌（頼実・夏24）に加えて「長暦二年九月十三夜、源大納言の家」の歌合の撰外歌である頼実の次の歌の文脈と用語を取っていると思われる。

風

よしの山もみちちるらし我やとの こすゑゆるきてあき風のふく
(頼実・秋55)

俊頼のこの歌は、藤原清輔撰の『続詞花集』（秋下272）に採られ、『新古今集』（秋下533）では有家と雅経によって撰ばれたが、後に俊成男定家も遺送本『近代秀歌』（7）で、「これは幽玄に面影かすかにさびしきさまなり。」と評した一首であり、俊頼の達した境地を示していると思われる。

VI院政前期

恨躬恥運雑歌百首

沙弥能食上

もみちゝるをとば時雨にたくへとも まきるゝかたもなき身也けり
(俊頼I・雑上1437)

俊頼は、官職に恵まれず不遇であったその境涯を嘆いた「恨躬恥運雑歌百首」（俊頼I・雑上1410-1509）を残す。右の一首（俊頼I・雑上1437）の上の句は一瞥、西宮歌会の家経詠（家経11）に似るが、一首全体は頼実詠に通うものであろう。本稿の骨子である頼実詠（頼実・冬93）を「山里の境地に、深々と身を沈めているよう」な歌として挙げられた後藤氏が以下に述べられるような、頼実の歌の奥深い所までこの一首は踏まえているように思われる。「時雨の音は、ある時は時雨かも知れないし、ある時は木の葉の音であるかも知れない。音を聞きまがえる趣向が眼目なのでなく、時間的に空間的に具象的な場をしめる、詠み手のありよう」「木の葉ちる宿」という言葉は、一般概念に拡散してしまう前の、個的な体験を感じさせる」「時雨する夜も時雨せぬ夜も」という下句の結びは、「雨というよりも孤独な、冬のおとづれ」「凄しい夜の、時間の積み重ねを感じさせる。」「色のない世界が、逆に輪

郭を明らかにしてくれるような、この傾向を中世的と名づけることは許されるだろうか。」⁽¹¹⁾

この俊頼の歌はまた、次の好忠のも踏まえているようで、紅葉の散る情景を歌ってその境涯から発せられた心情が色濃く投影していて、注目される。

(九月中)

きる人も世になきものはあきやまに かせのふきたつにしき
なりけり (好忠 I 260)

(九月おはり)

あきふかきやまのにしきもつきたらは きる人なしにちりぬ
はかりそ (好忠 I 271)

「着る人が誰もいない。それなのに又この上もなくすばらしいものは、秋の山に風が吹き立てて織りなした紅葉の錦であるよ。」(好忠 I 260)「秋がたけなわで、山の紅葉の錦も、織り尽してしまつたなら、あとは着る人もなくむなく散って行くだけだ。」(好忠 I 271)と歌う好忠は、華やかな「紅葉の錦」に取り合わせるのに、「きる人も世になきもの」「きる人なしにちりぬはかりそ」と「きる人なし」を持ってくる。そこに藤岡忠美氏が「沈倫の歌」や「曾禰好忠の訴嘆調の形成」⁽¹²⁾で述べられた好忠らしさが表れており、歌の眼目もあったと思われる。

本稿では、しばしば俊頼が頼実の歌から影響を承けていることがみられた。「雨後落葉」題の俊頼の歌(俊頼 I・冬 579)(詞花・秋 135)(和一字・後 97)(中古六 38)が、『後葉集』では、「落葉如雨」題で入集していることもつけ加えておく。

落葉如雨といふことを

なごりなく時雨の空は晴れぬれど猶ふるものは木の葉なりけり (後葉・秋下 187)

VII 安元元年(二五五)十月十日右大臣兼実歌合

落葉

十番 左 勝 右大臣

槇の屋にたえず音なふ木の葉こそ時雨れぬ夜のしぐれなりけれ
右 清輔朝臣

閨のうへにをりをりそそぐむら時雨かわける音や木の葉なる
らむ

左歌、心をかしく、詞きよらかなり。「時雨れぬ夜はの時雨なりけれ」の句、きはやかにて、相模御の歌とおぼえたり。右歌、わが言なればにや、させる難はなしと思う給ふるを、「かわける音心得ず。ぬれたる音いかなるぞ。」など申さるる人ありし、わりなく侍り。資通大貳の歌合に、良勢法師の歌にも、「風にかわける声きこゆ也とこそよめれ。但し、左歌こよなくて、右はまけ侍りぬるにこそ。」

(四〇一 安元元年十月十日右大臣兼実歌合 19・20)

右歌の自詠について清輔(二四二七)の判詞に引用された「資通大貳の歌合」の「良勢法師の歌」とはⅢ(一五八 太宰大貳資通歌合)の僧らいせいの次の歌である。

紅葉

四番 右

僧らいせい

神無月よはの寢覚にもみぢ葉の風にかはける声きこゆなり

（一五八「永承五年九月—天喜二年十一月」）

冬・太宰大貳資通歌合8

清輔のこの判詞はその歌合評論の現存する限りにおいて最終のものである。彼はその翌々年、安元三年六月廿日（玉葉）に七十歳をもってこの世を去っている。

清輔はまた、左歌の句について「きはやかにて」と評して「相模御」の歌に言及している。後に『玄玉集』（草樹下705）『続後拾遺集』（冬427）『題林愚抄』（冬上5078）に採られた右大臣兼実の歌の判詞にいう相模の歌とは万寿二年（一二三三）の、九月廿日余りに詠まれた次の歌ではなからうか。

なかつきのはつかあまり、しくれおかしきほとゆふくれに、ある所にさしをかせし、としころのきたのかたをさりてはなれるたまへりとき、しかは

後人しれすころなからやしくるらむ ふけゆくあきの夜はのねさめに
（相模183）

中納言定頼家をはなれてひとりはべりけるころすみけるところのこしばがきのなかにおかせ侍ける（後拾遺・雑二936）IVにも登場した相模は頼実の叔母に当たり、Ⅲ資通の叔母であり義姉でもある。長暦二年九月十三夜源大納言歌合においては、義弟「六人党」頼家（1007?—1060?）の代作をしている。

清輔はその撰になる『和歌一字抄』『続詞花集』に多くの「六人党」の歌を記し、本稿でもみたように、その著『袋草紙』に「六人党」の逸話を多く記す。「落葉如雨」題歌は、頼実が夭亡し

たこともあって、秀歌祈請説話（袋草紙64・無名抄67・今鏡135・西行談55・八雲御抄・兼載談15）を生むが、それを最初に記したのも『袋草紙』である。

源頼実無術執此道一參詣住吉、秀歌一首令詠可召命之由祈請すと云々。其後於西宮、

木葉散る宿は聞わく方ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜もと云歌は讀也。當座不驚之。其後又參詣住吉、同祈請。夢示云、秀歌讀了。非彼落葉歌哉云々。其後秀逸之由謳歌。其身六位之時夭亡云々。（『袋草紙』上 雑談）

「落葉」を時雨と聞く発想の歌を辿ってきた。頼実の「落葉如雨」題歌が同時代及び院政期の歌人達に大きな影響を与え、俊頼や匡房ら後代の歌人も頼実の歌を高く評価していることが窺えた。そして、落葉を時雨と聞く同趣の歌の中に頼実の歌をおいてみると、その歌が秀抜なまとまりを示して、抜きんでいることも見て取れた。さらにつけ加えるならば、藤原基俊（1060—1142）も、頼実の歌をその撰著『新撰朗詠集』に「落葉」題（新撰朗・秋298）で収めている。これは「落葉如雨」題歌をとりあげたものとしては『後拾遺集』（冬382）に次いでおり、基俊自身の頼実に対する高い評価を示しているよう。

斯界の絶対的存在であった公任。一世紀前の斯界の重鎮であった紀貫之・凡河内躬恒。これらの先人を受け継ぎながら、そこに新味を盛り込んでいった六人党・頼実。そして頼実の後には経信・俊頼・基俊・清輔・俊成らが続いていたのである。

三 一木の葉散る」山里―能因・頼実・俊頼

二のⅢⅤⅦまでに挙げた人々は「落葉」を時雨と聞く発想の歌の他にも「六人党」との関わりが見られた。就中、頼実においては、聴覚に関して際立っていたと思う、特に俊頼との関わりに於いて。

Vに掲出の頼実の歌は秋風を詠んではいても、下の句に重きがあつて、秋風はその背景のように思われるが、

右大弁のさそひ給しかは、むめつにまかりて、河辺水秋

夕風

秋風のをきのはすゑるゆふくれに 人まつひとの心をそしる

(頼実・秋73)

それを承けた俊頼の歌は、くれかかる秋の夕景を詠んで、ひっそりとした風の音を感じさせ、一日の長が見られた。

夕のかせといへる事をよめる

秋きては忍ひなあへそと思へはや 風をとつれてくれかゝる

(俊頼Ⅰ・秋372)

らん

同じくVで挙げたように、俊頼の「深山落葉」題歌が

ひくるれとあふ人もなしまさきちる みねは嵐のをとはかり

して (俊頼Ⅰ・冬593)

頼実の次の歌を踏まえていることは古くから知られているが、

山庄にまかりて日くれにければ

源頼実

ひもくれぬ人もかへりぬ山ざとはみねのあらしのおとばかり

して (後拾遺・雑五1145)

次の頼実の二首も、

くひな

ふるさとはとひくる人もなかりけり たゝくゝひなのおとはかりして (頼実・夏24)

風

よしの山もみちちるらし我やとの こすゑゆるきてあき風のふく (頼実・秋55)

俊頼の次の歌に影響を与えていた。

障子の絵に、あれたる山さとに紅葉ひまなくちりたる所をよめる

故郷はちる紅葉ゝにうつもれて のきのしのふに秋風そふく

(俊頼Ⅰ・秋560)

そして、IVに掲出の俊頼の「終夜聞落葉」題歌は、

ひとりぬるふせやのひまのしらむまで おきのかれはにこのはちる也 (俊頼Ⅰ・冬597)

藤原仲実(二〇七―一二八)が『綺語抄』(居處490)でその例歌として取り上げた「ふせや」が表象する山里の、その萩の枯葉にふりつむ落葉の音を「ひとり」聞く冬の夜の寂寥感を詠んで、「山里的」境地に、深々と身を沈めているよう」な頼実の歌(頼実・冬93)を思い起こさせる。

俊頼の家集における「落葉」結題歌十三首の内、聴覚において「落葉」を捉えるのは、「深山落葉」題(俊頼Ⅰ・冬593)とこの二首であり、山里の落葉を詠むのはこの一首のみである。

同じく俊頼の家集で頼実の歌頭の語「このはちる」を詠みこむ四首の内、聴覚で「落葉」を捉えた冬の景はこの一首のみである。

他の三首は次の歌である。

夜深聞鹿

このはちる峯のあらしに夢さめて 涙もよほす鹿のこゑかな

(俊頼 I・秋448)

詠月

木の葉ちる秋にしなれはてる月も あはれをかけにそふる也
けり

(俊頼 I・秋481)

いく田の森のまへをすくとてよめる

こきもとれみても忍はんゆふされは いく田の森にこのはち
るなり

(俊頼 I・冬596)

俊頼はこの歌(俊頼 I・冬597)を詠む時、「落葉」結題であり「木の葉散る」で印象づけられる頼実の歌を意識していたであろう。俊頼の歌は落葉を時雨と聞く趣向ではないが、その葉が風に鳴る音で秋の到来を告げる「萩」が今や「枯葉」となっている。風になるその「萩の枯葉」に重なる「落葉」の音を形象したところに俊頼の工夫もあったのであろう。

Iの「嵐の声」として閑寂な山里の落葉を表現する能因の歌

神な月ねさめにきけは山里の 嵐のこゑは木の葉なりけり

(能因 I 38)

IIの雨をさらに繊細に捉えた「時雨」として落葉の音を表現し、歌頭の「木の葉散る宿」で、孤独な冬のおとづれを、結びの「時雨する夜も時雨せぬ夜も」で、凄じい夜の時間の積み重ねを感じさせて、人を内面に向かわせる力を持っている頼実の歌

このはちるやとはきゝわくことそなき しくれするよもしく

れせぬよも

(頼実・冬93)

そして、「萩の枯葉」に重なる「落葉」の音を「ひとり」聞く景を詠んで、冬の夜の山里の寂寥感をしみじみと表出する「終夜聞落葉」題の俊頼の歌

ひとりぬるふせやのひまのしらむまで おきのかれはにこの
はちる也

(俊頼 I・冬597)

能因・頼実・俊頼は、「落葉」それも華やかさのある散る紅葉でなく、散る「木の葉」を聴覚において捉えて、「色のない世界が、逆に輪郭を明らかにしてくれるような、この傾向を中世的と名づけることは許されるだろうか。」⁽¹³⁾と評される景を形象した。それぞれに人々の心を捉える秀歌である。聴覚においてある事象を捉えて、その達した境地を示しているともいえよう。能因・頼実(「六人党」)・俊頼という系譜が浮かびあがってくる。頼実の「木の葉散る宿」歌(頼実・冬93)が和歌史において重要な位置を占めていることが窺える。

四 「落葉如雨」題

頼実が「落葉如雨」題の秀歌を詠んだことに関しては、彼が「落葉」結題にどのように取り組んだかを考えることも重要であろう。ここで、歌題について考えてみたい。『平安和歌歌題索引』に拠ると、「六人党」と同時代及びそれ以前と思われる「落葉」結題は「落葉隠路」「落葉残秋」「落葉如雨」「落葉繞樹」「落葉埋菊」「落葉満水」「落葉満庭」「霜埋落葉」「池上落葉」である。この内、「落葉繞樹」(範永72)「落葉満水」(新古今・冬556家隆)⁽¹⁵⁾は

「六人党」の長元八年冬大堰紅葉題歌会、「落葉如雨」（頼実・冬93）（家経11）（範永74）（経衡45）は、同じく長久四年冬の西宮歌会、「落葉埋菊」（家経75）（範永30）は永承二年秋（家経集配列による）の歌会の題である。

「池上落葉」「落葉残秋」は経信（二二六・二〇九）の家集中の題である。「落葉残秋」は『大納言経信卿集』（経信I 79）にしかなく、この家集の性質及び「池上落葉」についていえることだが、経信が「六人党」中で最も若い頼実（二二五・二〇四）よりまだ一歳若いこと、その頼実の影響を承けていること（別稿）を考えると、「六人党」の歌会が先であろう。

「落葉隠路」は「六人党」の周辺にいた（経衡232・233）清成の歌題である。この清成は天喜二年筑前守となり下って行った（経衡136・137）経衡に関する史料である天喜三年三月廿日の『平安遺文』（4935～4937）に見える。また、『僧暦綜覧』に拠れば、長久五年（二〇四）法橋。永承二年法眼を経て、康平四年（二〇六）法印・同五年検校という経歴である。長久五年（寛徳元年）に亡くなっている頼実より後の人であろう。

「霜埋落葉」は、頼実の従兄資通の同母妹の夫敦貞親王（二〇四・六）や能因・範永の周辺にいた人物の歌題である。「中務宮」敦貞親王は頼実の「長岡」山荘を訪れて、そこでの歌会に参加した（頼実・秋45・49）している。

残る「落葉満庭」（頼実・秋69）は、頼実の家集『故侍中左金吾家集』中の題である。この集は部類され、その部分は基本的に年次順となっていることから、「長久二年九月十四日庚申」（頼

実・秋64）、「長久三年うるふ九月のつこもり」（頼実・秋74）の秋に詠まれた題と推定される。

つまり、「落葉繞樹」「落葉清流（水）」は長元八年冬大堰紅葉題歌会、「落葉満庭」は長久二・三年秋、「落葉如雨」は長久四年冬の西宮歌会、「落葉埋菊」は永承二年秋、「池上落葉」「落葉隠路」「霜埋落葉」「落葉残秋」はこれらより後に詠まれたと思われる。

この「落葉」結題の流れを「六人党」史としてみると、長元八年冬大堰紅葉題歌会に「落葉繞樹」「落葉満流」題で詠んだ時には、「六人党」がこういう題で詠んだという段階で終わったものを、長久二・三年秋の頼実の「落葉満庭」題を経て、「落葉如雨」題の頼実の秀歌の生まれた長久四年冬の西宮歌会が開かれたということになる。

長元八年冬の大堰紅葉題歌会は「六人党」として初めての歌会であることを前稿で述べた。彼らの中に「落葉」が意識されていたとみてもよいだろう。最初にこの歌会で「落葉」結題が詠まれたことを考えると、その歌題を設けたのは歌会参加者の一人であろう。その一人とは家経（九二・二〇五）¹⁸と思われる。彼は「六人党」の先輩格・範永（九三・二〇七）¹⁹と同年輩であり、範永と親交が深かった。長元八年の「落葉満流」題でみると、「落葉満流」（家経4）の家経に比し、範永は「木の葉なかれにみちたり」（範永20）という題である。「木の葉」でなく「落葉」とする家経の方が「落葉」結題の形式を意識していると思われる。また、家経は永承二年夏「瞿麦勝衆花」（家経68）同三年冬「行客吹笛」（家経

91) 題歌の序者となっており、同じ儒家の藤原明衡(九八九-一〇六六)「勘解由次官あきひら」が天喜二年秋に「月照水」題歌の題者となっている(為仲 I 50) ことも参考になる。

この歌会を開いた六人党の意義は、実力は頼実程の人ばかりでも無かったが、そうであっても、「六人党」として集まって歌会を開いて同じ題で詠むことによって、人々の注目を引き、「落葉」結題を人々の中に普及させていった所にある。

「落葉」結題を最初に設けた人物は頼実ではなかったが、彼が長元八年冬大堰紅葉題歌会において「紅葉落衣」題で経衡と共に詠み、長久四年冬の西宮歌会に加えて、長久年間に「落葉満庭」「落葉裳苔上」題歌をも詠んでいることを考えると、「六人党」仲間との切磋琢磨の中で触発され、「落葉」結題を強く意識し積極的にそれを行った人物は頼実であろう。頼実は「葉落」結題も含めて、「落葉」という事象に真剣に取り組み、それを自分の内面に深く取りこんだのであろう。そういう頼実がいて長久四年冬に「落葉如雨」題歌が詠まれたと思われる。

長元八年冬の「紅葉落衣」題のような「葉落」結題で詠んだ人も「六人党」以前に無く、貫之が次のような句題和歌を詠んでいるのみである。

山里の家はへりけるに水のうへに木のは落てなかる
山ちかき所ならずは行水も もみちせりとそおとろかれまし

(貫之 I 360)

(古六帖・木紅葉 407) (玉葉・冬 877)

そして、頼実・経衡とも一世紀前の貫之と同じく「落葉」を視覚

で捉えている。

栖霞寺にて、もみちころもにをつといふたいを
もみちはゝわかころもてにかゝれとも きて見るひとのあか
すもあるかな (頼実・冬 87)

おほ井にて、紅葉ころもにおつといふ題

くれなるにそめぬたもともなかりけり はらひもあえすかゝ
るもみちに (経衡 46)

長元八年冬にはそれ以前の歌人の多くと同じく、「落葉」という事象を視覚で捉えていた頼実は、長久四年冬には「落葉」を聴覚で捉えて、人を内面に向かわせる力を持つ秀歌を詠むまでに成長したのである。「六人党」内で一番若く、その取り組む姿勢の真剣さ故に、その吸収力は深く強いものがあつたのであろう。

「落葉」を「雨」と聞く趣向は、『後撰集』の「降る」「紅葉」の例があることは、二 I 能因の歌で述べた。

秋の夜に雨ときこえてふりつるは風にみだるる紅葉なりけり

(後撰・秋下 407 読人不知)

しかし、「落葉」を「時雨」と聞くという発想は頼実が初発である。先ず、「木の葉」が「散る」のを「時雨」に喩える発想が同時代及びそれ以前には無く、「木の葉」が「落つ」「降る」まで拡張しても同様である。「紅葉」の場合も、西宮歌会で同座の家経の「もみちゝるをとほしくれのこゝちして」を除くと、「降る」に到って初めて「梨壺の五人」の源順、大中臣能宣の次の歌が拾えるが、視覚で捉えたものである。

(秋の野に色ゝのはなもみち散かふ、はやしのもと

にあそふ人くあり、たかすへたるもあり

時雨かとおとろかれつゝふる紅葉 あかき色をもくもるとそ
思ふ

(順Ⅱ 291)
(順Ⅰ 146)

九月十余日許におくれてまできたる人に、すゝかの山の
もみちいかならむといひはへるに、いみしうおもしろか
りつるよいひ侍れは

いそきこしことそくやしきすゝか山 もみちしくれもいまそ
ふるなる

(能宣Ⅰ 452)

また、その「落葉」の主体「葉」は華やかさを伴う「紅葉」では
なく「木の葉」であり、それを承けるのに「雨」と結びつきが強
く婉曲な表現の「降る」でなく、即物的な「散る」という語を用
いる。そして、その二つの語を、「散る」は「木の葉」でも、「散
る木の葉」でも、「木の葉」：「散る」でもなく、「木の葉散る」
という句として、それを歌頭にもってくる。

「木の葉散る」という句を歌頭にもってくるそれ以前の歌とし
て藤原興風、藤原高遠の例がある。しかし、「木の葉散る」落葉の音
を「時雨」と聞くと趣向では無く、一句の焦点は下の句にある。

このはちるうらにたつなみ秋なれば もみちにはなもさきま
さりけり

(興風Ⅰ 18)

(興風Ⅱ 13) (後撰・秋下 418 興風) (古六帖・木紅葉 4086)

このはちるそら (興風Ⅰ 61) (童蒙 689)

秋露梧桐葉落時

木のはちるときにつけてそなかゝに わかみのあきはま

つしられける

(高遠 283)

(夫木・雑十七 楊貴妃 16767) (題林愚・雑下・人名・楊貴妃 9980)
次の相模の歌は、落葉を「時雨」と聞くと趣向では無く、一
句の焦点も下の句にあるが、散る木の葉に涙の落ちるさまを重ね
合わせており、頼実の歌に影響を与えた蓋然性はある。

冬

このはちるあらしのかせのふくころは なみたさへこそをち
まさりけれ

(相模Ⅰ 554)

(新勅撰・雑一 1103) (続後撰・冬 468)

「木の葉散る」落葉の音を「時雨」と聞くと趣向は、それ
までの単なる雨と聞くと趣向という発想より新鮮だったであろう。雨と
いう大まかな概念でなく、さらに繊細に捉えた「時雨」、初冬の
降ったりやんだりする小雨、それは「木の葉散る」落葉の音と相
俟って、寂寥感を漂わせる。そして、人を内面に向かわせたりも
する。加えて、孤独な冬のおとづれを感じさせる「木の葉散る宿」
を歌頭にもってきて、一気に詠み下した頼実の手法。それらが、
同時代及び後の人々に衝撃を与えたとみるのは頼実に対する過大
な評価であろうか。

和歌史の上からは「落葉」という独立した歌題を用いたのは
『金葉集』の俊頼が初めてといってもよく、先駆的な試みであっ
た。有吉保氏は「千載集までの秋・冬部に入集し、しかも落葉、
もしくはこの季節と見做される歌についてまとめてみると、(中
略)(ハ)個人的には源俊頼の歌が多い」と述べられる。

しかし、家集において「落葉」結題をみると、頼実には先の索

引には記されていないが、二の皿で述べた長久四年の「落葉裳苔上」題（頼実・冬94）があり、長久二・三年秋の一首に「落葉如雨」題（頼実・冬93）を加えて三首である。十三首の俊頼に比べると歌数は少ないが、頼実百三首中三首、俊頼千六百十六首中十三首で総歌数中その占める割合は大きい。三首（頼実・秋69）（頼実・冬93）（頼実・冬94）は十三首の俊頼に比べて少ないけれども、比率としては頼実の方が大きい。また、頼実は長久五年（寛徳元年）に夭折しているので、すべてそれ以前の詠である。頼実は早くに「落葉」結題で詠んだ人であり、「落葉」結題の多い人なのである。俊頼が頼実の影響を受けていることが窺えたが、そのような頼実がいて、俊頼の「落葉」題も出てきたと思われる。

『新古今集』冬部で注目すべき中心歌題である「落葉」、それを勅撰集において最初に意識して題としたのは『金葉集』撰者の俊頼であり、「落葉」結題で歌を詠んだ六人党はその先駆となること、中でも、積極的にそれを行う、「落葉」という事象に真剣に取り組み、それを自分の内面に深く取りこんだ人物が頼実であることを推察した。

頼実の「落葉如雨」題歌が、俊頼・基俊・清輔・俊成らに高く評価されていたこと、和歌史において能因・頼実（六人党）俊頼という系譜を浮かびあがらせること、それは、頼実の歌が冬の夜の山里の寂寥感を表出するのみでなく、人を内面に向かわせる力を持っていたからではないだろうか。外界を見ないで内界に沈潜する、そこに、人は頼実の「個的な体験」のみでなく、自ら

の人生の感慨を重ねあわせたのかもしれない。

加えて、「落葉」結題における頼実の働き、「落葉」結題に真剣に取り組む頼実の姿勢。これらを考えると、「六人党」の牽引力であった頼実が「落葉如雨」題歌に関して秀歌祈請説話を残して夭亡したのは、和歌世界における頼実という人間を象徴する事象と思われる。「落葉如雨」題歌は歌における頼実という人間のすべてを語っている。「落葉如雨」題歌は、頼実のすべてをこめた精魂傾けた歌であったこと、そして、最後の歌と思われること、それらが人々の心を打ったのであろう。頼実の「落葉如雨」題歌が世に喧伝されているのは、故なしとしないのである。

注

- (1) 拙稿「俊綱家歌会と和歌六人党」『四条畷紀要』二号（h元・11）
- (2) 『中右記』寛治八年（二〇四）五月四日修理大夫俊綱朝臣妻卒去の記事「此曉修理大夫俊綱朝臣妻卒去、仍右中辨師頼朝臣、左京權大夫俊頼籠居、依爲養母也、」及び同年七月十四日入道橋俊綱卒去の記事「今夕入道橋俊綱卒去、年六十七、正四位上修理大夫近江守也、是依重病、近曾出家、及數十日、遂以非常、頭辨師頼朝臣、左京權大夫俊頼朝臣、爲彼人養子、」
- (3) 本稿に掲げる私家集は『私家集大成』に依拠しているが、頼実の詠歌場所が詞書に「道願寺」とあるので、この部分のみ『群書類従』本の「遍照寺」を採った。
- (4) 「おつるはな、あめのことしといふ題」は歌の内容から「おつるは、あめのことしといふ題」の誤りと思われる。

- (5) 「西宮」考—和歌六人党の詠歌の場合—(平成三年度全国大学国語国文学会・中世文学会秋季合同大会(於愛媛大学 h 3・10・13)の発表

- (6) 『和漢兼作集』(冬上943)も、作者を「中原長周」と誤っているが「落葉」題である。

- (7) 満田みゆき「相模伝記考(一)結婚まで」(『国文目白』22 S 58・3)

- (8) 註(1)に同じ。

- (9) 「葉散」結題及び「葉散」題は『平安和歌歌題索引』(瞿麦会編 h 6・12)にないが、「六人党」と同時代及びそれ以前と思われる題として、この「一葉散林」、及び「もみちのちる」(長能 I 89)

「紅葉ちりみたれ」(康資王母127)「このはちる」(金葉初・秋 374

藤原盛方)が拾える。なお、「散葉」結題及び「散葉」題に関しては拾えない。

- (10) 『私家集大成』の「あき秋(マ)のふく」(頼実・秋55)は『新編国歌大観』では「あき風のふく」であるので、この部分のみ『新編国歌大観』の「あき風のふく」を採った。因みに『群書類従』本では「秋風ぞ吹く」である。

- (11) 「平安和歌の屈折点 後拾遺集の場合」『和歌文学の世界 第二集』笠間書院 S 49・10

- (12) 『平安和歌史論—三代集時代の基調—』桜楓社 S 41・2

- (13) 註(11)に同じ

- (14) 高遠の歌題「落葉満階紅不掃」(高遠285)は註(19)の「秋露梧桐葉落時」(高遠283)と同じく「長恨歌」の句なので採らなかった。

- (15) 長元八年冬大堰紅葉題歌会の「落葉満流」題(家経4)が右の

索引にはなく「落葉満水」題(新古今・冬556 家隆)のみである。

「落葉満流」題で詠まれた家経の歌(家経4)が「落葉満水」題で『新古今集』(冬556)に入集したもので、家隆は家経の誤りである。

- (16) 『大納言経信卿集』(経信 I)は、関根慶子氏に拠ると、勅撰二十一代集成立以後、勅私撰等の諸書から編成した他撰家集である。

- (17) 拙稿「六人党」の生成と大堰紅葉題歌会」『文学史研究』37号(h 8・12)

- (18) 家経と範永は長元八年冬『落葉統樹』「葉落統樹」(家経3)「落葉木にめぐり」(範永72)『落葉満流』「落葉満流」(家経4)「木の葉なかれにみちたり」(範永20)、長久四年冬『落葉如雨』「落葉如雨」(家経11)「落葉あめのことし」(範永74)、永承二年秋『落葉埋菊』「落葉埋菊」(家経75)「らくえう、菊をうつむ」(範永30)と「落葉」結題を詠んでいる。

- (19) 頼実と経衡が「紅葉落衣」題で詠んでいる「もみちころもにをつ」(頼実87)「紅葉ころもにおつ」(経衡46)。「六人党」と同時代及びそれ以前と思われる「葉落」結題は前記索引にないが、「木のは落てなかる」(貫之 I 360)「秋露梧桐葉落時」(高遠283) IV 国房の「葉落月明」(和一字・明217) (和一字・落445)が拾える。この内、高遠については註(14)で述べた事情なので、「六人党」以前は貫之のみとなる。

- (20) 有吉保『新古今和歌集の研究—基盤と構成—』三省堂 S 43・4

- (21) 俊頼の十三首は右の索引の十二首に一で述べた一首(俊頼 I・秋518)を加えている。俊頼については、頼実のようにすべて調べたわけではなく、索引に拠るところが大きい、頼実の場合も索

引より一首増えたのみであり、俊頼の総歌数が多いことを考慮しても、その数に大過ないであろう。

本文の引用は、特に断らない場合は、私家集は『私家集大成』、歌合は『平安朝歌合大成』、勅撰集・私撰集類は『新編国歌大観』、歌論書『古来風林抄』と歌学書『袋草紙』は『新編国歌大観』五巻の底本に拠る。『金葉集』は、世に流布した『二度本金葉集』を指し、経信集は『大納言経信集』（経信Ⅲ）に拠る。

提示した歌の所収を示す○内には、私家集は『私家集大成』、勅撰集その他は『新編国歌大観』に記す略称を用いた。